

特集 始まりの絆



東日本大震災や原発事故など、私たちに大きな被害をもたらした2011年は、人と人とのつながりなど大切なことが見直された1年でもあった。この町には、10年前から絆づくりを呼びかけてきた事業がある。この事業が伝えたかったものは何なのか。復興を目指す私たちはこの事業から何を学ぶべきなのか。10年目を迎えた今年、あらためて検証したい。



Pick Up 今月のイベント

中央商店街 イルミネーション 点灯式

町内の中央商店街や猪苗代駅前などを鮮やかに彩るイルミネーションの点灯式は12月9日、如風庵で開催されました。約1万個の電球が商店街を明るく照らしているほか、まちのえき「まるしめ」、中央商店街駐車場、工房ポプリ、六角橋交差点とJR猪苗代駅前の5カ所には、趣向を凝らした大型のイルミネーションが設置され、通行人を楽しませています。

また今年も、商店街の街路灯の一部に、町民などが制作したステンドグラス50枚が張られました。36回の講座を開き、延べ274人が参加したなど事業の概要が説明された後、指導に当たったステンドグラスアーティストの松崎徹さんがあいさつをしました。

制作に参加した山本留夏さんと富岡町から避難し、活動に参加した鈴木時子さんもあいさつに立ち、鈴木さんは「天鏡閣と土津神社を作りました。自分の作品が街路灯になって人の目を楽しませること、何年か後に自分もまた見られることが楽しみです」と感想を述べました。

皆さんが制作した街路灯のステンドグラスとイルミネーションで彩られた中央商店街。ぜひご覧ください。

まちの応援マガジン いなわしろ
広報猪苗代 Jan.2012
1
No.615



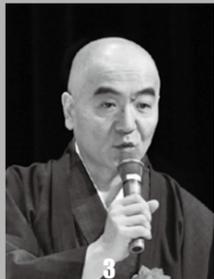
今月の表紙

今年で10年目を迎えた「母から子への手紙コンテスト」。普段、面と向かって伝えられない言葉や思いを応募用紙に書きつづるお母さんたち。その一文字一文字から、お母さんたちの優しい気持ちが伝わってきます

【撮影日】 12月20日
【撮影場所】 学びいな

Contents — 【目次】

- 02 年頭のごあいさつ
- 04 Pick up
- 05 特集 始まりの絆
- 10 申告相談会
- 13 猪苗代町議会議員一般選挙
- 14 スクールトピックス & ニュース INAWASHIRO
- 16 まちの話題
- 18 笑顔でこんにちは／サークル紹介／保健だより
- 20 学びの泉
- 22 いなわしろタウンページ
- 26 暮らしの情報広場
- 28 みんなの美術館／食生活改善推進員コーナー



Genyu Sokyū



Oishi Kuniko



Sue Toshimitsu



Kobayashi Mitsuko

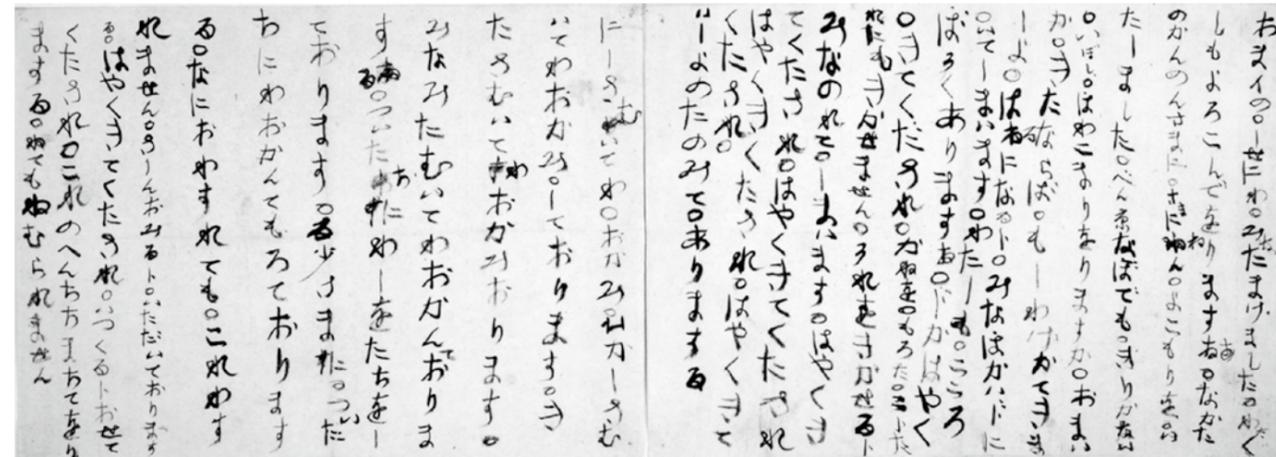
3,4,5,6 講評を述べる最終選考委員の玄侑宗久さん、末利光さん、大石邦子さん、小林光子さん。10年間、同委員を務めた皆さんに実行委員会から感謝状が贈られた



1 町内のお母さん76人による一次選考会の様子 / 2 大賞を受賞し、表彰状を受け取る菊池さん。「玄侑先生をはじめ、選考委員の皆さんに身に余る評価をいただきうれしい。猪苗代のお母さんたちが作ってくれる郷土料理が楽しみです」と話した



※大賞、準大賞作品については、先月号に掲載されています。その他の入賞作品については、町体験交流館ホームページをご覧ください。http://www.town.inawashiro.fukushima.jp/taiken/



母シカが英世にあてた手紙。愛する息子に会いたいという気持ちが真つすぐにつづられている。(野口英世記念館所蔵/写真協力)

母から子への手紙コンテスト

子どもにとって、人生で一番最初の人間関係。それが母との絆。「母から子への手紙コンテスト」は人間関係の一番大切な部分をもう一度見つめ直す機会だ

野口英世博士の母シカが、渡米中の野口博士にあてて書いた手紙がある。文字の読み書きができなかったシカが、必死で読み書きを学び、書きあげた一通の手紙。そこには息子に会いたいという真つすぐな思い、母から子への愛がつづられていた。この手紙にちなんで、本町で「母から子への手紙コンテスト」が始まったのが平成14年。町絆づくり実行委員会（八子弥寿男実行委員長、野口英世記念館長）が主催するこのコンテストには、毎年日本全国から、わが子への愛情をつづった多くの手紙が寄せられている。

第10回「母から子への手紙コンテスト」

第10回「母から子への手紙コンテスト」の表彰式は12月4日、学びいなかで開かれ、応募総数1828点の中から、大賞に輝いた菊池孝子さん（福島市）ほか入賞者に賞状などが贈られた。最終選考委員の皆さんが講評を述べた後、菊池さんが受賞作品を朗読。東京消防庁に勤務する息子が、東京電力福島第一原発事故の現場で放水作業に当たり、無事に終了するまでの様子を、時折、声を詰まらせながら読み上げた。

その後、最終選考委員の大石邦子さんが「生きること、愛すること」と題して記念講演し、表彰式は幕を閉じた。式終了後には懇親会が開かれ、一次審査を担当した町内の母親たちが、入賞者にごつゆ、漬物や手打ちそばなどを振る舞いながら交流を深めた。

「親子」を見つめ直す

このコンテストは、母から子への思いを手紙に託し、親子の絆を見つめ直すとともに、1通の手紙を通して、書き手と読み手にその思いを共感してもらい、心のネットワーク（絆）を構築してもらおうと始まった。

読み手となる一次審査員には、町内の母親たちが当たり、最終選考に進む作品を選出する。微笑んだり、涙を流したりしながら手紙を読む母親たちは、きつと手紙の中につづられている物語の一つ一つに共感し、自分の子育てや人生などを重ね合わせているのではないだろうか。

母親と子どもの関係は、子どもにとって、人生で一番最初の人間関係。手紙を書く母親はもちろん、審査に関わった母親たちも、子どもとのつながりの大切さを再確認できるのが、このイベントの魅力だ。



お母さん委員会委員長
一次選考委員代表
最終選考委員

小林 光子さん

Kobayashi Mitsuko

まずは10年間もこのイベントの最終選考委員をしていただいている先生方にお礼を申し上げます。それぞれがその道の第1線で活躍する方ばかりですが、大変お忙しい中、ずっと猪苗代に通ってください、これからも続けようと言ってくださいありがとうございます。応募してくださった皆さんも、一流の先生方に講評してもらえらることを、大変楽しみにして表彰式に参加されています。町のお母さんたちも、先生方や応募者との交流を楽しみにして、ごつゆ作りから接待まで協

力してくれています。若い世代のお母さんたちは、共働きも多く、なかなかお母さん委員会に参加しづらい状況であると聞いていますが、審査員になるのが無理でも、コンテストの表彰式では先生たちの貴重な講演を聞くことができるので、来年は若い方たちにもぜひ参加してほしいです。今年コンテストは、3月の大震災のことを書いた手紙も多く、読んで心が痛みました。被災したお母さんたちが、あれほどのつらい体験を400字にまとめるのは、大変な苦勞であったと思います。94歳のお母さんからも応募がありました。その内容も、自分のことは心配しなくていいから、あなたたちが幸せになりなさいという娘を心配する手紙でした。母親の思いはただ一つ。自分がいくつになっても、子どもの幸せを願っているということ。この10年間、手紙を読ませていただいた感想です。

今こそ親子の絆を

東日本大震災を機に、人と人とのつながりが見直されている。復興という目的のためには、人と人とのつながりは欠かせない。まずは一番近くから見つめ直し、つながろう。親と子が、そして家族が



二瓶尚大さんと慶子さん(三城湯) 尚大くんは家族みんなの愛情を受けてすくすくと成長中。家族は、震災後も尚大くんのおかげで笑顔で過ごせたと話す。

古き良き時代の日本には「親子愛」や「家族愛」のような言葉はなかったと記憶している。親や家族への愛情は、あつて当たり前。家族が生活をしていく中で、当たり前前に受け継がれていったものだった。

近年、その当たり前が当たり前ではなくなっていた。核家族化、少子高齢化などが進む中で親と子、家庭と地域社会との関係は希薄化し、ついには社会全体の中で、人と人とのつながりが薄れていた。

子どもや老人への虐待、家族間の殺人事件やDV(ドメスティック・バイオレンス)配偶者や恋人からの暴力)などのニュースを聞かない日はないほどだ。「親子愛」や「家族愛」は、積極的に声に出し、欲しなければならぬものになってしまったのかもしれない。



母から子への手紙コンテスト事務局 生涯学習課

荒川 昭典 主査

Akikawa Akinori

日頃から多くの皆さんにご支援をいただき、誠にありがとうございます。

近年の社会・生活環境の変化などから、親子がゆつくりと会話をする機会は減少しています。新たな通信手段の普及によって「手紙を書く」という文化そのものも衰退しつつあります。

そんな中、見失いがちな自分自身と向き合い、素直な気持ちを取り戻せることが、このコンテストの魅力ではないかと考えています。町内のお母さんたちが一次審査を行うという独特

のスタイルも人気の要因なようです。

第1回のコンテスト後、応募数は毎年1000通を超え、今回は1828通と近年では一番多い件数になりました。

昨年の3月に発生した東日本大震災により、絆の大切さが再認識されたこと、震災の経験や記憶を後世に語り継ぎたい、あるいは亡くなった人が生きてきた証を残したいという思いが、今回の応募数の増加につながったと考えられます。

今回は、折り鶴、四つ葉のクローバーや応援メッセージが同封されたものも多く、このコンテストが全国の皆さんに支えられているのだと、あらためて実感しました。

生涯学習課では、見つめ合い、語り合い、育み合える社会環境を目指し、「母から子への手紙コンテスト」をはじめ、さまざまな事業に取り組みしていきますので、これからもよろしくお願いたします。

今こそ親子の愛から

東日本大震災を機に、多くの人が家族や地域の「絆」について考えさせられた。

先にも述べたとおり、母親と子どもの関係は、子どもにとって人生で一番最初の人間関係。社会の中で最小のコミュニケーションである家族の中でも、核となる親子の関係がしっかりとつなげなければ、他人とつながることなどできない。つまり、この絆がしっかりとつながることが、人と人とのつながることへの第一歩だ。

自分が親の立場でも子の立場でも構わない。生まれてきたばかりの子どもに「生まれてきてくれてありがとう」と思った気

持ちや愛に包まれて育てられた環境をもう一度思い出してみよう。そこには、お互いを思いやる感謝の心があったはずだ。

愛という字にも感謝の感という字にも「心」という字が入っている。お互いの心を通わせ合う親子のつながりが、人と人とのつながりの基本になる。その心が家族へ、地域へと広がっていくけば、より強い地域コミュニティを築くことができるのではないだろうか。

復興に向けては、人と人とのつながることは不可欠。そのための最小単位が親子だ。まず最初に、親子が、家族がつながることから始めよう。

特集 始まりの絆 終わり



お母さん委員会 副委員長 一次選考委員

遠藤 富士子さん

Endo Fujiko

町内のお母さんとして、第1回からこの事業に関わっています。一次選考委員だけでなく、いろいろな経験をさせていただきました。最終選考委員による二次審査のお手伝いでは、先方の議論の深さに驚かされました。手紙の文章から裏の裏までを見通すような皆さんの読解力は素晴らしい。あれが聞けただけでも、すごく勉強になりました。

第3回までの会場はホテルでしたが、第4回からは役場に移りました。その時から地域の特色を出そうとこづゆや漬物を振る舞いました。第7回からは会場が学びいなに移ったので、それも振る舞えるようになりました。今年はこのこづゆが食べたくて妻に応募させた」と言ってくれる人も

いるなど、皆さんに喜んでもらえているようなので、ずっと続けていきたいと思っています。第1回からの応募作品を振り返ると、核家族が増えていることや時代の移り変わりを反映していることが見て取れます。人間関係が希薄になったと言われている時代ですが、いくつになっても子を心配する親の気持ちは変わりません。

嫁いだ娘からしばらく連絡が来ないと「ご飯でも食べに来たら」と連絡をしてしまう。「もういいよ」と言われても、帰っていく娘の車をいつまでも見送ってしまふ。子どもは恥ずかしくありませんが、親というのはそういうものです。

そういう心が、親から子へ、子から孫へと受け継がれていくことを願います。



東日本大震災で感じた絆 矢森徹郎さん・香さん 美咲ちゃん・はるかちゃん

【徹郎さん】

東日本大震災の時、私は役場で仕事をしていました。地震は収まっても家族に連絡は取れない。娘は保育所にいるので大丈夫だろうと思っていましたが、家にいる両親や妻は無事か、ケガはしていないだろうかと心配でした。夜になってやっと連絡が取れ、家族全員の無事を知った時はほっとしました。何があっても両親、妻や子どもには無事でいてほしいと心から思いました。

【香さん】

震災の直後は、子どもが心配で急いで保育所に迎えに行きました。けがもなく本当に良かったと思いました。私の実家は川俣町。近くには山もあるので、山が崩れたりしないか、放射性物質は大丈夫なのかと心配が続きました。猪苗代町に嫁いでも、実の親も心配。それが親子だと思えます。